

## 「はむらの道徳科授業指針」子どもの視点④

### 共に学び合うかいがある

子どもが「共に学び合うかいがある」ことを実感し、主体的に意見交流を行うようにするには、どのような配慮が必要でしょうか。

前号同様、子どもに「学び合うかいがない」と思わせてしまう授業をあえてイメージし、そこから授業づくりの要諦について考えてみたいと思います。

第一にあらかじめ他者の考えを予測できてしまう場合、交流活動に身は入らないでしょう。

自由な発想による複数の考え方が可能なら、意見交流は自ずと進むでしょう。

第二に、自分の問題として受け止めにくい場合、子どもは学び合う気にはならないはずですが。

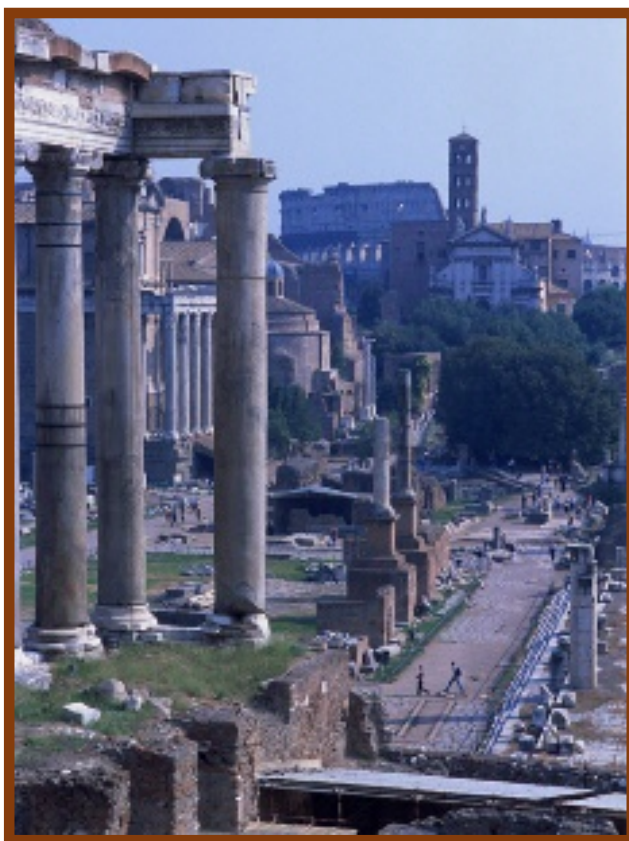
自分の生活の中に生かしていこうとする思いや課題を培った上で交流させることが必要です。

第三は、根拠に基づく意見が述べにくい場合、交流は空疎なものになりがちです。

意見を表明する際、日常の体験等に基づく根拠を伝え合うように工夫したいものです。

第四は、本音で語り合うことが困難な場合、学び合うかいも生じにくいでしょう。

何でも語り合い、認め合い、支え合える学級の雰囲気が、学び合いの質を高めます。



### 師をもつ

哲学者・教育者 森信三

人はすべからく、終生の師をもつべし。  
真に卓越せる師をもつ人は、終生道を求めて歩き続ける。  
その状あたかも、北斗星を望んで航行する船のごとし。

出典：「賢人たちに学ぶ 道を開く言葉」本田季伸著（かんき出版）

※ この場にあの方がいらしたら、どのような教えをいただけるか。折々に思わせるのが師ではないでしょうか。